會日

昭和十一年十一月 | 61 | 日本山岳會

日本式ヒマラヤ登攀

立教大學山岳部のナンダ・コット登攀隊が遂にその所期の目的を達し美事に二萬二千五百三十呎の頂上に到達したことは全く快心のニュースであつた。九月二日にベース・キャムプに入つて以來十月の半過ぎに至る迄、登攀隊の消息が全く絶えてゐたことは、遠い日本に在つて一行の動靜を氣遣つてゐた者にとつて、少からず焦燥の念を抱かしめはしたが登頂成功の報に百日の溜飲を下げた思ひがあつたのである。

九月三日から十月五日までの一ケ月間一行が如何に奮鬪しつゝあつたか、ベイス・キャンプ迄の往復の苦勞など、新聞に現れた報道だけを以てしては僅にその一斑を知り得るに過ぎない。殊に山にかゝつてからの大切な部分は到底一行の口から直接に聞き得るの時を待つより致し方がないであらう。

併し乍ら、既に傳へられた極めて部分的な報告からしても、我々が今後のヒマラヤ遠征に就いて學ぶ所は決して少くない。

第一に擧げなければならないのは我々日本人が西歐人に比し、遙によく印度の還境に適應し得る素質を與へられてゐることが立證された點である。何人かの實際旅行者の經驗により、又常識的にも、我々はこのことの有り得べきを相當强く確信してゐたのだが、今回の經驗によつて少からず自信を强めたといつてよいやうに考へられる。新聞に報道された所によつて一行が山にかゝる迄は、殆んど全く土地の食物に依存して旅行したといふことが察せられるのであるが、これが食料の準備の上に、又それの輸送計畫の上に甚大な影響を齎すことはいふ迄もない。併し同時に又我々は一行が醫師を同行してゐないので病氣に對して非常な注意を拂ひ、水一杯飲むにも注意を怠らなかつたといふ事實をも看過してはならない。

ナンダ・コット隊は登攀隊と人夫との關係に於いても大きな經驗を得たやうに見える。一行がアルモラに到着した時、土地の人夫が一行の國籍を定めかねたといふ事實は、如何に一行が印度の太陽に磨きをかけてゐたとはいへ、西歐人の場合には考へ得べからざることであらう。東洋人が印度に於いて大規模な人夫操作を行つたといふことは今回を以て嚆矢とすることであるから、此の點は何人も深い關心を拂つた所であるがそれだけに、此の問題が滿足に解決されたと聞いて、愉快に耐えないものがある。由來印度に於ける探檢隊や登攀隊の直面する大問題——最大問題とまではいはれなくとも——は人夫操作にありとされてゐた。ブルースの偉大さの少からぬ部分は人夫操從に於ける彼の腕前に歸するものとされてゐた。アブリヂ公や、スポレト公の探檢隊の業績も多分に人夫衆の協力を得た所に負ふてゐるとされてゐる。挺身自ら進んで難きにつくといつた風のバウアー隊のカンチェンジュンガ登攀や民政官として永年に亘り印度の土着人に親んでゐたラトレッヂの率ゐるエヴェレスト隊の行動の跡を見る時、登攀隊と人夫との間に從來にない變化が起りつゝあることを認めない譯にはゆかない。併し乍ら、印度の土地の人々の間にあつて、彼等に對して親しみを抱き、又彼等に他所行きならぬ感じを抱かしめた點でよく今回の隊の程度迄達し得たであらうかは問題であらう。我々は此の點に於いては非常に惠まれた地位にあるといはなければならない。そして何はともあれ、此の第一回の試驗に於ける成功を將來の失敗によつて帳消しにしてはならないと考へるのである。

登攀隊は何れも日本以外の地に於ける登山には全然無經驗な隊員によつて組織せられてゐた。此の純日本製の隊が、最初の日本からの遠征に於いてその目的を達したことは我國の登山界に甚大な影響を齎さないではおかないだらう。

「アルプスで登るのならばアルプスに行け、何時まで英國の岩場で藝當をやつてゐても駄目だ」といつた樣なフィンチの言葉を我々は想起しない譯には行かない。此の意味を延長すれば「ヒマラヤで登るならばヒマラヤへ行け」といふことになる。そして確に此のことは疑ふ可らざる眞實であらう。併し同時に我々は此の言葉の意味を强調する危險をも充分意識してゐなければならないだらう

ヒマラヤ登攀に日本が進出することが、新な問題を展開し、其處に日本的な何物かを齎すであらうことは疑ふ餘地がない。併し又、日本的なる部分に必要以上に依存することは危險でもあるといはなければならない此處に大きな分別を必要とする所がある。

立教隊の成功の鍵は一つではない第一に擧げなければならないのは數年間に亙るその準備期間に於ける勉强と精進とである。之は我々の能く知る所だ。第二には現地に於ける行き届いた心遣ひと山にかゝつての奮鬪である。殆んど苦鬪と稱するに値する最後の奮鬪の有樣を讀み、又、胸に描いて我々は此の登攀隊の爲めに敬意を表さない譯には行かない。第三は、謂ふ迄もなく幸運だ。山に登り山を識る者は、此の第三の要素大さを知つてゐる筈だ。それ丈けのに、一行が幸運に惠まれたことを心から祝福しない譯には行かない。

ナンダ・コットの登頂は我が登山界に大きな一期を劃するであらう。そして將來のヒマラヤに於ける我々の奮鬪如何では世界の登山史での一つの時期をも劃することゝなるであらう。（松方）

今シーズンのヒマラヤ

この夏から秋へのヒマラヤは各國の遠征隊で賑はつた。英國のエヴェレスト、英米合同隊のナンダ・デヴィ、佛國のヒドン・ピーク、獨逸バウワア隊のカンチェンジュンガ、それに立教のナンダ・コットといふ盛觀である。その成果としてはエヴェレストは今迄にない慘敗を見たが、ナンダ・デヴィ七八一四米の頂は英米隊によつて登られて、人間の達した最高峯はカメットの七七五六米から更に引上げられた。

佛國遠征隊はエヴェレスト遠征隊と同樣、惡天候に阻まれて引返しを餘儀なくされた。バウワアの隊は目下登攀中だといふ。いづれ彼のことだから華々しいニュースでわれ〳〵を驚かすだらう。

これらに伍して日本の立教隊がナンダ・コット登頂したことは、山の大小は別としても、われ〳〵にとつて嬉しい限りである。ヒマラヤについて書くこと自身が既にわれ〳〵にも身近かのことを書いて居るやうな氣を起させて呉れる。以下各登攀隊の概略を報告しよう。

エヴェレスト・一九三六年

六月十五日發のラトレッヂ隊長の電報が「深雪のため登攀を打切る」旨を傳へて人々を失望させたが、全く今年の天候は甚だしく惡かつたらしい。例年激しく吹きつのる北西風が今年は勢が弱いため、北上するモンスーンに對抗する力がなく、そのためベンガル灣から僅四日にしてモンスーンはヒマラヤに到達してしまつた。（五月二十九日ラトレッヂ發電報）この北西風の弱かつたことは氷河上のキャンプ設定には非常に樂であつたのだが、さてノース・コルにかゝつて見ると、雪が例年のやうに飛散しないで置かれたために深く積つて甚だしい困難を醸したのである。五月十八日の深雪でノース・コルのキャンプを撤收してから後、六月六日シプトン、ウィン・ハリスが北西風で雪が拂れた後を見てノース・コルへ向ひ危く雪崩の危難に遭ふまでの間、遠征隊は一進一退の苦難をなめた。強い北西風—積雪の飛散—前進—再び降雪退却といふ憂鬱を繰返したわけだ。しかし六月六日ノース・コルにおける二人の經驗から今年はノース・コルは登攀不可能といふ結論に達した。そして六月八日にはロンブク氷河本流を溯つてノース・コルの西側に登路を求めようとして全員出發、十四日にスマイス、ウィン・ハリスが輕キャンプを携帶して雪崩地域をさけて偵察に登つたが、その結果今年は既に不可能にしろ、この方面からより安全にして直接にノース・コルへ登り得る見透しをつけることが出來た。これは大きな收穫と云はねばなるまい。

攻撃既に五回、しかもエヴェレストは最も激しい一面を今年の遠征隊に示したのであつた。

佛國のヒマラヤ遠征隊

五月下旬バルトロ氷河にベース・キャンプを張つた一行は、早速目的の Hidden Peak 攻撃に取掛り、

五月廿九日キャンプ Ⅰ 五二〇〇米
同 三〇日 同 Ⅱ 五八〇〇米
六月 二日 同 Ⅲ 六一〇〇米
同 一〇日 同 Ⅳ 六六〇〇米
同 二〇日 同 Ⅴ 六九〇〇米

と漕ぎ付け、キャンプⅤより尙進んで扶壁の頂部七〇六九米まで達し、登攀技術上より見て困難なる部分は終はつたのであるが、例年より三週間も早く此地方を襲ふた季節風は夥しい降雪を齎らし、遂に征頂の目的を拋棄するの已むなきに立至つた。七月三日上方キャンプの撤回は困難を冒かして敢行せられ、十三日には Skardu に全隊員恙がなく引上げたとの入電があつた。（此の項 T・F）

ナンダ・デヴィ登頂

英米合同隊は八月二十九日、ナンダ・デヴィ登頂に成功した。このガルワールの峻峯、七八一四米のナンダ・デヴィ登頂は、單に大英帝國版圖内の最高峯が登られたのみでなく人間の達した最高頂の記錄を、スマイスによつて五年前登られたカメットから奪つた劃期的登攀と云へる。

登攀計畫は米國ハーヴァード大學山岳會と英米合同隊との協力の下に成り、隊員は英米人各四名づつ、隊長グラハム・ブラウン教授の下にティルマン、ルーミズ、オデル、ロイド、エモンス、カーター、ヒューストン等エヴェレストのヴェテランやミニヤ・ゴンカアの猛者が加はつた。もつともヒマラヤの經驗を有するのは一九二四年のエヴェレストへ行つたオデルとシプトンと行を共にしてナンダ・デヴィの内陣探險に成功したティルマンの二名だけである。

一行はラニケートを出發、八月七日ナイニ・タル峽谷一八、〇〇〇呎の地點にベース・キャンプを設置して、三週間後に登頂に成功したといふだけしか現在わからない。

この成功の一因が速攻主義の下に隊員の輕裝（カナダ製防風布を使用）乾燥食糧、等によることが報道されて居る。

ナンダ・デヴィ登攀の最難關は、山と打組む前に險惡な峽谷遡行をやつて内陣に到達しなければならぬことで、しかも五十名分二ケ月半の食糧を携行してこれを登つたのは相當難行であつたらしい。このために伴つたポーターは五十四名。

ロングスタッフがトリズール七一二〇米に登頂してからその最高頂登攀記錄がカメット登攀によつて更新される迄二十四年の歲月が過ぎた。カメットからナンダ・デヴィ迄は僅五年である。ヒマラヤ登攀の盛況は今後もこの勢で人間の登り得る頂を次第に高めやがて八千米級に足跡を印するに到るだらう。

バウワア隊

バウワアをリーダーとする獨墺山岳會のウキーン、ヘップ、ゲットナーの一行四名は五十五名のポーターを率ひて八月二十一日、カンチェンジュンガ東麓のゼム氷河のベースキャンプに到着した。一行はカンチェ附近の登攀、偵察を行ふらしく、今年カンチェの頂を目指して居るわけではないらしい。むしろトレーニングの意味を以て歩き、明年ナンガパルバットに出掛けてベヒトルドの仕事を完成させやうといふ意氣込らしい。しかしバウワア達のことであるから、やがて相當のニュースは提供されることであらう。

ナンダ・コット登頂

立教大學登攀隊の一行五名は十月五日、目指すナンダ・コット六八七七米の登頂に成功して、無事十月十八日アルモラに歸着した。詳細は新聞紙上に既に詳しいから述べる必要もないが、九月二日ベース・キャンプ到着以來一ケ月餘の間二回にわたる攻撃を行ひ、しかも一名の故障者もなく全員登頂に成功したことは、初めてヒマラヤに遠征隊を送つた日本の山岳界にとつて喜ばしい事實である。今後の海外遠征への一里塚は遂に見事に設けられた T・S

故郷の山

雑誌「山」の本年四月號に、杉浦健一氏が書いて居られる「山」と信仰生活といふ記事を興味深く讀んだ。その中で木地屋の事に關して、會津の山奥では「コレタカシンノウと申される方が故あつて山に流され、猿を妻として木地屋を始められた。それが木地屋の先祖である」と云ひ傳へられてゐるさうだ。

そこで山岳講座の高橋文太郎氏「山の民俗學」の木地師の項をあけてみたら、次のやうな文字が眼に入つた。「近江愛知郡東小椋村君ケ畑、蛭谷の木地屋村では、清和天皇の御兄皇子小野宮惟喬親王が都から遁れて此の山奥に入り山民に木地挽く業を敎へ給ふと傳へてゐる。」

かういふ傳説は方々にあるのであらうか。と云ふのは僕の故郷の山奥の村でも同じ話を聞いてゐるからである。それは石川縣江沼郡西谷村眞砂といふ山奥の行きつまりの部落で昔この村に惟喬親王が足を留めさせられ村民に食籠の製法を敎へられたと傳へられてゐる。そして現に親王の冠は上出といふ家にあり、提灯は宮本といふ家にあるさうである。

こんな村へ僕が行つたのはまだ中學生の頃で、そこから大日山（一三六九米）といふ山へ登るためであつた。僕の故郷は同郡の大聖寺といふ町で（大聖寺といふ名は白山五山の一）東京の高等學校へはいるまで、僕は日本アルプスなんて見た事もない田舍の中學生であつた。しかしその頃から山が好きで、故郷の江沼郡の山は全部登らうとしたものだ。その最高峯が大日山なのである。江沼郡を圍む山は大てい千米前後だが、あらかた登つた。何しろ日本でも有數な雪の深い所だから、四月頃行けば大てい樂に登れる。「奥山遊覽記」といふ舊幕時代の記錄と照らし合はせて、當時七錢五厘だつた地圖に名前を書込んだりして、中學生相當の山岳熱をあげてゐた。

おそらくその後あんな山々へ登る人もあるまい。とすれば江沼郡の山に就ては僕が誰よりも委しいわけだが、しかし都會から遠い千米位の山では誰も相手にしてくれまい。若し物好きな暇な方があつて、一體どんな所だと思ふ人があつたら、五萬分の「大聖寺」と「永平寺」（共に二十萬分の金澤のうち）をつないで、そのつなぎ目あたりを見て下されば

（深田久彌）

川海苔

本邦の山間の清冽な溪流に「川海苔」と云ふ、外觀は略々あの海産の海苔に似た綠藻が自生してゐる。生時はエメラルドの樣な輝かしい美しさをもつて、川底の岩上に流れのまゝに搖れて生育してゐる。昔から日光では「大谷川のり」、富士山麓では「桂川のり」或は「芝川苔」として知られてゐるが、此外にも各地で種々の名稱をもつて呼ばれ、山間の珍味として通人の間に賞用されてゐる。

山村の旅舍でも折々食卓の一隅に見かける事があるが、元來が極く淡白な風味をもつたもので香氣も薄く、あまりパッとしないものであるからどうかすると出來の惡い淺草海苔位に思はれて顧みられずに片附けられてしまひ勝である。

所で、山岳人に相當親しみをもつてゐる此海苔は其分布の狀態を考究してみると、之が又、植物學者ばかりでなく一般山岳研究者にとつても案外に興味深い事があるのばどこまでも山と緣のある藻である。

一體「川のり」の仲間は此樣な淡水産のもの丶外に海産のものも氣性のものもあつて、現在世界に十四種類ある事が、知られてゐるが此等の種類は殆んど其總てが兩極をめぐる寒冷な地方に分布してゐて、もし、熱帶或は溫帶地方に産する場合は山岳地帶に限つて自生してゐる。所で、最近D. Knebel は此等の各種に就て一つの分布圖を作り上げたが、頃日筆者は偶然此圖を或地質學者に見せた所、此分布曲線は丁度嘗て世界が廣く氷河に覆はれてゐる頃、其最後に現在の樣な狀態にまで後退した時の緣線とほゞ一致すると云ふ事であつた。そこで我國に産する淡水産の種類を現在の分布狀態を調べてみると、何處のも山間の溪流に限つて生へてゐて、決して里近い所には見當らないし、それも目下の所では妙な事に何れも太平洋に注ぐ河川の上流に限られてゐて日本海に注ぐ河川には見られないと云ふ事になつてゐる。之等の事實に就て、目下の學界の定説の大要を摘載してみると、嘗て日本の寒冷時代に此藻は廣く各地に分布してゐたが、其後氣候溫暖になるにつれて寒帶性の此藻は川の下流に繁茂したものは絕えて、僅かに上流の冷水の中に生じたものが殘存して繁殖し、遂に今日各地の河川の上流に點在して殘つてゐると考へられ、又、此以前廣く各地に分布してゐた時代には日本海は未だ成立して居なかつたと説明されてゐる。所で、近年此「川のり」の仲間が樺太の海豹島から報告せられたが又、續いて北千島からも海産の一種が發見せられて甚だ面白くなつて來た所、つひに最近思ひがけなくも之が臺灣から知られて來て、正に晴天霹靂の感をいだかしめた。此臺灣で發見されたのは阿里山の海拔約一八〇〇米の地點の溪流で、流石に平原地帶には生へてゐないのは面白く、之を前記の世界の此仲間の分布狀態と思ひ合せる時、誠に興味津々たるものがある。

嘗て臺灣の山からはあの氷河遺存生物と云はれてゐるサラマヲマスが發見されて問題となつたが、今回更にの此の氷河期と關係をもつと目されてゐる藻類が報告された事は生物地理學上甚だ興味深い事實であると思ふ。

然し此發見を以て直ちに臺灣の氷河問題に結び付ける事は尙多大の考慮を要する問題ではあるまいかと考へる。

最後に目下我國から知られてゐる「川のり」の種類を附記する。

（十一・十・十四）

1. *Prasiola japonica* Yatabe.
川のり。鹽原溪川から九州球磨川に至る太平洋沿岸河川の上流。淡水産。

2. *Prasiola formossna* Okada
臺灣川のり、臺灣阿里山長谷川溪。淡水産。

3. *Prasiola crispa* (Lightf.)
樺太川のり（新稱）。樺太海豹島海鳥叢上、氣性。

4. *Prasiola borealis* Reed.
北川のり（新稱）。北千島幌筵島鳴川海岸。海産。

（岡田喜一）

Adventure Books

田邊主計

いま Peter Fleming の News from Tartary（韃靼の便り）を讀んでゐる。傍題に「ペキンよりカシュミルへの旅」と書いてあるやうに、北平から鄭州へ南下、西安、蘭州、西寧を經由、西藏北部を横斷して新疆省に入り、眞直に西へ進んでカシュガル到着、そこからフンザを通過してスリナガルに出た時の紀行文である。北平をたつたのが昨年の二月十五日夜半で九月十二日夕方スリナガルに着いたのであるから、ちようど七ケ月を要し、その行程は三千五百哩に及んでゐる。大部分は世界の最も荒涼とした部分の一つである。Sir Eric Teichman の言によれば "I do not suppose there are many parts of the world from which one can disappear into the blue quite so completely as in that part of central Asia"

この旅行は單に距離が長いばかりではなく、大部分が文明からかけ離れてゐる上に、それが支那及ソヴイエト聯邦の政治的範圍内であるため一層困難且不安だつたのである。支那の現狀を知つてゐるものは、實は支那領土である之等區域内の旅行者に對し中央政府が必ずしも安全を保證し得ない事を認めるであらう。西藏は所謂「支那」からは餘りに遠いそして新疆省は現在ソヴイエトの「影響」のもとにある。新疆省への一般外國旅行者の出入は極めて困難のやうで、この方面の確實な旅券は望み難い。それでも入つて行きたいものは、この不安を冒して、だまつて入つて行くのではないか。著者も完全な旅券を持たずに入つて行つてしまつたのである。

この旅行は Ella Kini Maillart といふ婦人と共に行はれた。最初の一部分、北京から蘭州までは白系露人夫婦を加へ四人で行つた。この人たちは嘗て住んでゐた Tsarcam へ歸還する機會を求めてゐたもので、道案内として同行したのであつた。しかし、目下、各國間の政治上の「理由」は屢々個人の自由と幸福とを奪ふ。ウルムチで發行されたこの露人たちの旅券は蘭州に於ける地方官憲を滿足させなかつた。彼等は一週間をその交渉に費したにも拘らず、それから先の旅行は許されなかつたのである。止むを得ず、彼等二人は露人と分れ、六本のブランデイとマコウレイの「英國史」とを携へて蘭州から西寧へ、それから茫漠たる西海の地平線の彼方へ消えて行つてしまふのであつた。

携帶したものは、まだ他にも少しある（三六頁）。ママレイド二パウンド、ココア四罐、チヨコレイト小包三個、煙草は相當澤山、ソース一瓶ちよつとした藥品、衣服若干、コンパス二個、ポータブル・タイプライタア二臺等を北京から持つて行き、天幕とスリイピング・バッグとは西寧で調達する事が出來るのであつた。食料は途々求めて簡單な料理鍋を使つてゐる。それから鳥を打つ獵銃を持つて行つて何か獲つて食べて行つた。護身用の武器は何も持つてゐなかつた。この人は武器は持たない方針なのである（三七頁）。正しく彼等二人は他の人の言葉を引用すれば「ルク・ライフルとフライパンと數語の支那語の智識とを以つて」この遠い旅行に出かけたのであつた。嘗てジョンソン氏は旅行者に六つの忠告を與へた。その六に "Cast away all anxiety, and keep yuor mind easy"（七六頁）とあるといふ事であるが、彼等もその通りのやうである。寫眞器はライカカメラを用ひたライカは片手で操作出來るから馬の上からでもどん〳〵撮れていゝと書いてゐるが、この書に挿入されてゐる五十七枚の寫眞の中にはそれらの地方の風景と住民の有樣のありのまゝを傳へてゐる優れたものが多いと思ふ。マコーレイの英國史は extremely exciting だつたといふ事である。——西海の邊境一日で天幕の中にのびてこれを讀耽つた。

私がピータア・フレミングの名を知つたのは、一九三四年の支那旅行記 One's Company によつてゞあるから最近の事である。當時彼は二十六歳であつた。彼の筆致はなかなか精悍ではないだらうか。そして時々オソリテイに對して辛辣な筆を與へてゐる。昨年五月二十八歳の誕生日を迎ふと書いてゐるから、現在まだ三十に達しない青年である。

三月六日三匹の騾馬に荷をつけて彼等は蘭州をたつて西へ向ふ。それからは駱駝や騾馬を雇つたり買つたり、それを賣つて別のを買つたりして、隊商に合流したり、その地方地方の案内者を雇入れたりして旅を續けて行く。三月廿一日「支那」最終の町 Tangar に到着、それから西藏高原に入つて行く。五月七日 Teijimar に到着。こゝまで來ても、新疆省の樣子は全く解らなかつたのであるが不安の地域へなほも進んで行くことにした。六月十四日ちようど北京をたつて四ケ月目に車爾成 Cherchen に到着。七月六日には和闐 Khotan に入る。この邊の地方政府はソヴイエトにコントロールされてゐる。Turki の軍隊はサマルカンドやタシユケントの街できかれるのと同じコミュニストの行進歌を唱つて行くのであつた。七月十七日葉爾羌 Yarkand に到着。カシュガルがもうそう遠くはないといふ事が彼等を樂しま

◇閑書棚より◇

大正十二年の立山遭難當時は富山あたりで連鎖劇が上場されたり、琵琶歌が出來たりした。何れもとり〳〵に相當なもので、何はともあれ故人板倉に見せたいものばかりであつたが、此處に載せる「鴨綠江節」ともその一つである。題して『立山登山之友』といふ15×9糎二十一頁の小唄集で、作者は成瀨碧波とある。大正十二年七月十日の發行。（S・M）

×

立山の雪で海なす
アの彌陀ケ原
スキー場世界にアラ照らさんと
（琵琶入り）　槙氏一行は突破して
目的達し人夫をば
返して二度の滑走せん
別れまもなく惡天の
白山築き雪の爲め
道失なへし三人づれ
其時三田の勇猛は
今ぞ奮闘の時なりと
音に名代の松尾坂

せた。カシュガルから印度へ向ふ。Mintaka 峠は支那と印度とを區切るものである。その峠から彼等はその旅を終る地である印度を眼下に眺めることが出來たのであつた。それから路はフンザに向ふ。あとは大した事はない。この美しい山國の住民はスコットランドの高地住民をなつかしく想出させた。八月二十八日フンザの首都Baltit に着。こゝは世界で最も美しい都であらうと彼は記してゐる。こゝからは Rakaposhi（二五、五〇〇呎）の美しい姿が眺められるのである。こゝの Gilgit からスリナガルまでは十二日の行程とされてゐるが彼等は荷が輕かつたので八日を要した。九月十二日夕方、この長い旅路の伴侶であつた藥罐と料理鍋とを捨てるに當つて、さすがにいくらかの感傷を身にしたのであつた。彼等は騾馬から自動身に移つてスリナガルのホテルへ向つた。街頭にはエリザベェト・ベルクナアの映畫「エスケイプ・ミイ・ネヴア」の廣告が貼られてゐる。そして、ホテルに着くとイイヴンング・ドレスの人たちが彼等のひどい風體を嫌忌の目つきを以つて眺めたので、再び文明の地に戻る心安さと、假令、その旅行が辛苦のものであつたにしても、何となくそれと別れる哀愁の漂ふのを感じるやうに思はれるのである。

單にこの本の紹介を書くだけが私の目的ではなかつた。他にも言はうとする處がある。それは、この本がベスト・セラーの一つに加へられてゐることである。同氏の「ブラジルの冒險」のことは知らないが「ワンス・コンパニイ」も一九三四年八月に出版され四ケ月後即ち同年十二月には第八刷になつてゐる。大體英國又は、むかうの人たちは冒險紀行を好むのではないか。時々發表されるベスト・セラーの中には常にこの種の書物があげられてゐる。又、アドヴェンチュア叢書のやうなものが各書店から出版されるのを見ても頷けるのである。例をヤングハズバンド氏の「エビック・オフ・マウント・エヴエレスト」にとれば、この本は出版後數年に渉つて版を重ねてゐるのは單に其當座だけではなく其後も讀者を得たのであらうと思はれる。山へ登る人は寧ろ我國よりも少なく恐らく山といふものを我國の人程騷がないのではないかと思はれる英國に於てはこの「エヴエレスト登山記」の如きも山に關心をもつ人たちだけの間ではなくもつと一般に讀者を獲たのではなからうかと思ふ。

優れた冒險旅行記は野性に魅力を感じ、未知の世界の新しさを知らうとして常に幻想を夢みることのある人々にとつては誠に欣びを與へるものであらう。又、これらの旅行者こそは常に夢みる人々であると共にそれの實現を試みる熱意と實力とを持つてゐるのである。——しば〳〵何らの「爲にする目的」も無く、たゞ之等の大旅行に出發する事さへあるのではないか。フレミング氏もこの旅行の結末を語つて"..... absolutely no results of scientific or any other value, and the only possible justification for it was that was great fun to do." と言つてゐる。

我國に於けるこの種の「冒險」旅行記は、私の知つてゐる限り、甚だ少ない。凡そ旅行記を書くには先づ旅行をしなければならない。——尤も、ジュウル・ベルヌの「海底旅行二萬リーグ」「八十日間世界一週記」とか「輕氣球に五週間」とかいふ空想冒險物語もある。これらのかつては空想であつたことが今では實行される事柄になつてゐるのも「夢見る事」がしば〳〵「實現」のきつかけとなり、もとゐとなる事のあるのを知るのである。（この「海底二萬リーグ」がアフガニスタン語に翻譯されてゐることがこの本に記してあつたので想出して書いた。）

それでは我國にはそのやうな旅行者が無いのであらうか。別に鎖國令が發布されてゐるのでもないから、いろ〳〵遠くへ旅行をする人もある筈だと思ふのであるが、我々を樂しませるそれらの旅行記の刊行は殆んど見られない。又刊行されても、それがベスト・セラーの中に入るかどうかは疑しいと思ふ。

終に、この旅行の同伴者であつたエラ・メイヤルに就て、一言すれば——彼女は今年三十二。瑞西に生れ十代から歐州の各地に生活の困難と戰ひ、無一文にして伯材へ出て或映畫會社に働き、スキーの映畫にも出た事がある。（彼女はスキー、ホッケイ、ヨット等の選手であつた）當時、一日一食を以つて生活する「練習」さへしたと言ふ。後に或人から五十弗を借用してモスクワに赴き、やはり映畫事業に關係してゐた。その間にロシア探險隊に加つてカウカサスを北から南へ旅行し、次にロシア・トルキスタンへ赴いた。この九ケ月に渉つて Kizil Kum から Kirghiz Zazks の邊境に行つた單獨旅行については、一九三四年 Turkestan Solo（佛語より英譯）が出版された。今度の中央アジア横斷旅行だつて、恐らく、彼女は單獨であつても平氣でやり遂げた事であらう。この樣な婦人はむかうでも異例に屬するかもしれない。しかし、我國も人口一億に近いと言はれてゐる。少し位異色ある人がゐても差支へはないかと思ふ。又、現在優秀な若者たちが多く凡庸な「勸め人」生活に安逸を求めることを周圍からも强ひられ、また自らもそれが一番良い暮し方のやうに考へ、その大部分はいち早く青年の新鮮と彈力とを失つて行くのは惜しいことのやうに感じられるのである。

雪踏み越えて兩君を
助けんものと氣を勇め
三田氏救援
甲斐もなくヨー
無慘やマータ
板倉氏は犧牲となるチョイ〳〵
×
偉大なる雪で名高き
アノ彌陀ケ原
レコード破りしアラ三田君よ
ヨイショ
（琵琶入り）眞夜中雪中も厭はずに
道踏み迷ふて苅込が
池の邊（ほと）りに出でたもふ
不思議なるかな白髮の
老人彼へ現はれて
方向教へたまへけり。
面影人夫に
氣をまされヨー
漸くマータ
着いたは湯元までチョイ〳〵
×
スキー界で鬼と云はれし
アノ板倉氏
世界一なるアラ立山で
ヨイショ
（詩入り）人生五十　過半を超ゆ
二十歳早く共　優美彌陀
原を觀ず
我死する共　三田槇の兩
氏
我願ふなる　此の目的を
達すべし
是れが此の世の
お別れとヨー
遺言マータ
殘して露となるチョイ〳〵

◇會員通信◇

ナンダ・コット登頂

OKAGESAMANITE MINATO-CHO BUJIGEZAN MINASAMA-NI YOROSHIKU RIKKIO

（御蔭樣にて皆登頂、無事下山皆樣に宜敷く。立敎）

アルモラ十月十九日發電

×

前略　豫てから御配慮を煩して居りました當山岳部ヒマラヤ踏査隊は去る拾六日夕刊（拾七日附）の大毎、東日其他に於いて報道せられました通り若干の苦心の末本月五日午後二時五十五分（日本時間午後五時五十五分）ナンダ・コットの初登頂に成功致しました。是に依つて貴下の御後援を空しくせず日本登山界に些かなりとも寄與を爲すことを許されたのであります、忽々の際とて略書にて甚だ失禮ではありますが爰に御報告を兼ね豫ての御後援に對して厚く御禮申上げます。敬具

拾月拾七日

立敎大學々友會山岳部

追て踏査隊一行は拾壹月末歸朝の豫定であります。

富士山ケーブル問題

拜啓　會報五十九號紙上「富士ケーブルカー問題解決す」の御記載によつて、同問題が私共の希望した樣に落着したのを拜見し、洵に欣快にたへません。長い間に亘つて會の方々の御骨折り有難く感謝致して居ります。

小生は今夏七月下旬折柄の快晴に惠まれて御中道廻りをやり染々と富士の立派な山であることを感じましたが、同時に斯の靈山の胴腹を刳り拔いてケーブルカーを架けることを考へる人間が、同じ我々日本人の中にあることを思つてつく〴〵情なかつたのでした。が然し、今回その亂暴な案も葬り去られたと承り、實に清々しました。

仰せの通り第一の問題はこれで解決しましたが、第二、第三の問題が起らぬとは誰も云ひ得ぬ所で御座いますから、今後の我國自然美愛護のために會の皆樣の御自愛を切希せざるを得ません。

今朝は學校の屋上に上り西南の空にくつきりと立つ靈峰富士に向つて心から「よかつたなあ」と言葉をかけました。

九月廿五日　　手塚　宏壽

講演會御知らせ

十一月五日に豫定されてゐた小集會を十二日（木）に繰下げました。講演會の次第は左の通りです。

一、時日　十一月十二日（木）午後六時半

一、場所　赤坂三會堂

一、演題　兩極探險の想ひ出　白瀨　矗氏

南極探險船開南丸が壯圖を抱いて南の方へと芝浦を拔錨したのは今から二十五年前の十一月末のことであります。今年は此の先驅者の偉業を記念する爲め、南極探險記念會といふものが催されるさうでありますが本會に於いても白瀨翁を迎へて、探險に獻げられたその生涯の想ひ出の物語を聽くを得るに至りました。酒煙草、茶、湯をとらず、火を近づけざること七十年、然も今尙瞿鑠壯者を凌ぐ翁の風貌に接ずること自身少からぬ喜びでありますが、此の先蹤者から千島からアラスカへかけての北邊探險の冒險談や、南極探險の苦心談を聞くことを得るのは非常な喜であります。

○

拜啓　秋冷之候益御淸適奉賀候。富士山ケーブルカー問題については甚大の御援助に預り御蔭にて一段落の解決を見申候事國家のため慶祝至極靈峰をして永劫に守護するの一大防護戰の勝利を獲たるを欣快至極に存候貴會の天下大衆を率ゐたる御正論の致す所奉謝に不堪、今後いよいよこの鐵案の下に油斷なき努力をはらひ申度存候不取敢御挨拶申上候會員各位にもよろしく願上候。拜具

十月三日　大宮淺間神社宮司　高原　正作

穗高小屋

謹啓　愈々新雪訪れる候益々御淸祥賀し奉ります偖而皆樣の當穗高小屋も今夏は不慮の燒失に據り御不自由此上も無く深く御詫び申上ます。就而早速今秋までに再建の豫定で有りましたが種々なる都合に依り明夏ならでは竣功不可能と相成りましたのと今夏急造のバラックは目下取壞し燃料寢具等の準備も無き次第なれば從つて穗高小屋の冬期宿泊は御氣の毒乍ら不能と相成り冬期登山を計畫される方々には大變御迷惑と存じますが惡しからず御諒承願度此旨各位へも御傳言相煩し度不取敢右お詫び旁々御案內申上ます。

十月一日　飛驒船津東町　穗高小屋經營者　今田重太郎

グリンデルワルドから

あとから〳〵ヨーロッパでは面倒なことが起るが氣にしてゐてはきりがないから、思ひ切つてこゝまでのして來たが、二日と天氣が續かず、それでもファウルホルン、グロース・シャイデック、ベールエックの先きまで、遂にエッシネンゼーへ泰輔を擔ぎ上げる程のトレーニングをやつてブドウ酒でふくらんだ腹をへこますに骨を折つた。結局きのふ位から少し晴れたが山は新雪が多過ぎていかんとある。パリー駐在の名に背いても、とあしたは一應引返すことにした。

ブラヴァンド一家頗る健在、いつか君の家で寫眞を見た男の子も泰輔より大きい。グリンデルワルドいゝ所だが、夏は少し人類が多過ぎると思ふ。貴見如何。

九月十五日　グリンデルワルド　藤島　敏男

（松方宛）

「山岳」第三十一年第一號內容

山風、谷風、その他　藤原　咲平
冬のチャチャヌプリ　渡邊　漸
ホロンバイルより　京大山岳部
大興安嶺へ　同大山岳部
樺太東北山脈　盛岡英治郎
冬の濟州島漢拏山
「山の神とコダマ鼠の話」解說　高橋文太郎
山岳會の成立する迄　武田　久吉
遭難報告、新刊紹介、會報

第一號は右の內容にて校了。本月十五日頃には御手許に屆く筈です。第二號は引續き印刷中、左の內容を以て年內に發行の心算です（編輯係）

第二號豫告

積物の垂直分布の分ち方　今西　錦司
本邦氷河問題の回顧と現狀　岡山　俊雄
兩極探險の思ひ出　白瀨　矗
白馬の南股　田口　一郎
傳書鳩　三田　旭夫
觀天望氣術の科學的解說　菅原　芳生
小槍西壁　京都府立醫大山岳部
飯豐大又澤　飯塚　潔水
蒐谷より藥師　吉澤　一郎
山岳語彙採集帳　研究部

◇新刊紹介◇

Sierra Club Bulletin
Vol. XXI No. 1 Feb 1936

シェラ・クラブの三六年度年報は巻頭にやはりマウント・ウォディントンを掲げて居る。三五年七月の同クラブ員七名とハーヴァード山岳部員一名から成る遠征隊の記錄で、惡天候のため退却を餘儀なくされたものの、筆者ロビンソンの記述はたのしく讀まれる。

既に十三回にわたる攻撃を退け、一個の人命を奪つたこのウォディントンが果して登られるかどうかはアメリカの山岳界で大きな問題になつて居るがロビンソンはこれについて樂觀說を說へて居る。

この年報で興味深く讀めたのは、「ジョン・ミューアの思ひ出」といふ一文で筆者ウィリアム・マギーの親父とミューア翁との永年の交友を語り幼少の頃から常に伴はれてヨセミテ附近で愉快な生活を持つた思ひ出の記である。たとへば翁が永年の山行に決して地圖を携へずしかも通過不能の場所へ一度も迷ひ込んだことがないし、いつも翁の云つた所定の時間通りに目的地へついたといふこと、翁の登山三則（その一、足をいたわること、その二、厚い靴下に古い馴れた靴をはくこと、その三、一日數回休息の都度足を水で洗ふこと）或ひはミューア翁の歩き方がインディアン式に足をひきずるので、後からついて行くと埃が立つので困るといふ樣な笑話なぞから翁の文學的偉大さについてまで語つて居る。

Harvard Mountaineering
No. 4 June 1936

ハーバード山岳會報は一九二七年に第一號を出して今年が第四號だからわが學校山岳部年報の量的豐かさに比して誠に貧しいが、質的には一九三二年のミニヤゴンカア一九三五年のユーコン河、ウォディントン等々の探險等相當の活躍を示して居る。何しろ、一九三二年以來の年報なので全報告をまとめるといふわけにも行かないので、どく各遠征の概略を示して、その末尾にその遠征報告の發表された文獻目錄を附する編輯法をとつて居る。頁數僅に三十二頁の小册子である重寶なものである。

「爐邊」第六輯
明治大學山岳部發行

「部員諸君に告ぐ」（部長）山案內職について（高橋）北の山（小寺）一月の唐松より鹿島槍（合木）白馬杓子尾根（能登）一月の小蓮華尾根より小瀧へ（名川）赤石澤溯行（櫻木）熊の平より鹽見岳縱走（海老根）石空川より離山（木目田）三月の中ノ岳行（太田）之に加へて一昨年の夏横尾谷に遭難した針ケ谷宗次氏の追悼八方尾根の山寮建設に關する記事、其他」

爐邊はまだ第六輯なのかと感じさせた程學校山岳部の報告では古いものであるこの雜誌も一讀してそう感銘をうけなかつたのは殘念だが紹介者の記憶に殘つたものを拾ひ出して見やう。

高橋氏の山案內職についての考案は該博なる知識と豐富な材料をもつて書かれただけに興味深いものであつたが氏の考へを第三の近代的山案內職への發展においてもすこし詳しく知りたいと思つたのは私だけだらうか。

紀行文で面白かつたのは熊の平より鹽見岳縱走と三月の中ノ岳行である。

針ケ谷氏の追憶も友人の死を惜む純情で滿ちあふれ、あんな處で大事な友を失なつた部員諸君の悲痛がよく感じられた。上高地生活日誌と「ゐろりはた」はむしろなくもがなだ。書き方によつては非常に面白かるべきこの欄に編輯者はもつと力を盡すべきだと思ふ。之はたゞ爐邊のみだけではなくこの種の多くの報告について云へることだらう。

寫眞は「八峰キレット附近」と「不歸第二峰附近」がすぐれてゐると思つた印刷が最上とゆかないのが殘念だが原板はすばらしいに違ひない。

（I・T）

近頃山の古典が續々と復刻出版される。ウィムパーの本は既刊、今度マメリーのクライムスが出るらしい。然かも五シルといふ安物で、本物は拜見しないが、ともかくよい傾向だ。（圖書係）

會務報告

十月定例理事會報告

十月八日午後六時虎ノ門本會事務所にて開催

出席者　木暮、高頭、鳥山、松方、逸見、櫻井、田口、角田、島田、茨木、黑田（委任）、木村

協議事項左の通り

一、會計並に豫算の件
一、山岳編輯報告
一、山岳語彙蒐集計畫報告
一、十一月小集會開催の件

會員訃報

新潟縣　小杉源吉氏（昭和四年十月入會、會員章番號一一三七）

昭和十一年九月廿五日逝去せらる

本會は玆に謹而哀悼の意を表す。

退會者

昭和十一年十月中

（一五二九）東京市　藤村　良彦

新着圖書

ケルン　十月號ケルン編輯室
山小屋　同　朋文堂
寫眞月報　同　小西六本店
ツーリスト　同
ジャパン・ツーリスト・ビューロー
民具蒐集調査要目
アチック・ミューゼアム
霧の旅　第四九號　霧の旅會
登高會々報　第二號
アルカウ趣味　昭和七年—十年合本
日本アルカウ會
中村敬著　那須　大村書店
爐邊　第六號　明治大學山岳部
The Geographical Journal Sep. 1936
Natural History Sep. 1936
The Prairie Club Bulletin Sep. 1936
Butlleti del Centre Excursionista de Catalunya Juliol 1936
La Montagne Juillet 1936
Die Alpen Sep. 1936
De Bergids Sep. 1936

購入圖書

山梨山林會發行
富士山及其の附近　昭和三年
靜岡縣廳編
富士山國境爭論誌　大正十年

會員寄贈圖書

小島烏水著　アルピニストの手記
以上　小島久太氏

關西支部室に アルバイン・ジャーナル完備

關西支部では開設このかた圖書の充備に努めてをりますが、なにぶん經費がないので去る七、八月に會員藤木九三氏藏書の一部ヒマラヤ關係圖書を借入れ備付けましたところ、非常の好評を得ましたので引續き九月以來理事三木高岑氏所藏にかゝるアルバイン・ジャーナルを支部室書架に借藏來室者の閲覽に供してをります。右は創刊號より最近號まで完備したもので他にイギリス山岳會發行のアルバイン・レヂスターをも取揃へてあり、山岳研究上必須の文獻として、同好會員に少からぬ御便宜と考へます。なほ「本會」發行の山岳も創刊號より整備してをりますから日、月曜日を除き毎日午後五時より八時までの開室時間中に隨意御覽願ひます。

關西支部室は大阪北區堂ビル筋向ひ大阪貯蓄ビル三階にあり（入口は北側）新顔會員の御利用をおまちしてゐます。

◇事務所から

□住所の變更は御通知下さい。
□會費お拂ひ込み未濟の方はなるべく早く願ひます。
□會員通信は事務室内會報掛宛に願ひます。その他の會報關係の通信も同じく。

◇會報投稿規定

◇原稿締切毎月五日
◇原稿用紙は十六字詰のこと
◇本號第三頁のやうな斷版的想片、或は會員通信等を物に希望致します。
◇原稿は特に御希望なき限り一切返却致しません。原稿の取捨は會報編輯係に御委せ下さい。

訂正

前號所載會員有志晩餐會參會者氏名中大熊保夫氏を落しました。右追加致します。

細井君を悼む

細井君が場所もあらうに南駒で遭難しやうなどゝは全く考へも及ばなかつた。その位ひある地方に打込んでゐたし詳しくもあつた人だ。

越白山から南駒への尾根の途中で奚まじりの猛烈な暴風雨にやられたのである。前夜は谷で露營したことだし、その前は連日立て續けに激務に沒頭してゐたことだから、或は身體の調子でも多少惡かつたのではないかと思ふ。雨風と取組み合つてゐる内に遂に倒れたのである。十一月四日午後六時頃のこと、山はもう夜であつた。

故人に就いては『山岳』誌上に更めて筆をとる人がゐやう。玆では取敢へず『會報』編輯者達にとつて常によき忠言者であり、協力者であつた會員細井吉造君の訃を報告し、深く哀悼の意を表する次第である。

（逸見、中屋、松方、）

昭和十一年十一月五日印刷
昭和十一年十一月十日發行
發行者　松方三郎
編輯兼印刷者　逸見眞雄
東京市小石川區戸崎町一三
印刷所　多木印刷所
東京市芝區琴平町一（不二屋ビル）
發行所　日本山岳會
電話・芝・一六四九番
廣告一手取扱　進恒社
電話・四谷・六五四番

◇
山岳圖書展覽會目錄別冊
定價　並製　五十錢（送料壹圓（四錢））
上製
◇
「山岳」合本用表紙
一、上質バックラム（灰青色）
二、背、山岳第何年西暦を押す。
三、ビラは兩面に會章を押す。
四、前後見返し茨木畫伯筆。
五、一年分合本用表紙のみを所要の場合、五十錢（送料本會負擔）
六、雜誌を本會へ送付される場合製本料共一圓（返送料本會負擔）
◇
「會報」綴込用表紙
一、ビラは濃綠色レザー、會章押捺
二、背は濃紺色クロース。
三、代金四十錢（送料本會負擔）
御入用の方は振替又は小爲替にて御申越下さい。
◇
「會報」合本
一、一號より五十號までの合本表紙出來。
二、體裁會報綴込用表紙に準ず。
三、代金一圓（製本料、送料共）
◇
振替口座東京四八二九番
◇